

宗徹 積

相愛大学学長
(宗教学)

①ウィリアム・ダリントン著『ロミオとジュリエット』の人生 集英社
②菊池真理子著『神様』のいる家で育ちました 1 宗教 2 世な私たち
『文藝春秋』
③佐々木隆晃著『構築された仏教思想』 蓮如 佼成出版社

④信仰や宗教について関心のある人は必読である。信仰の恐ろしさ、むせかえるような犠牲、人間の複雑さと尊厳を垣間見ることが出来る。本書は、インドやパキスタンにおける各地特有の信仰が、簡潔な筆致で描かれている。複雑な宗教事情をよくこれほど整理された文脈で書けるものだと感心した。取り上げられているのは、九名の人物とその周辺である。著者はイギリスやインドで人気の作家らしい。紀行文であり、フィールドワーク報告であり、ノンフィクション小説であり、人間学の本である。ちなみにあげられている宗

教の概説書を読むより、この本の読破をお勧めする。邦訳と出版実況に力を注いだ訳者・パロミタ友美の情熱にも胸を打たれる。

②安倍晋三首相の銃撃事件という痛ましい事件をきっかけに、カルト2世(宗教2世)の苦しみが見えられた。実はこの数年、カルト2世の当事者たちがSNSで声を上げておられ、宗教に関心がある人たちの注目を集めていた。本書もそんな中でウェブサイトに掲載されたマンガである。あながきにも描かれているが、このマンガは連載途中で『宗教教団』読めばどこかすわわわからクレームが来て、いったん全話公開停止となった。そういう経緯を経ての書籍化である。カルト2世のリアルな暮らしと、生の声を聞くことが出来る。

③『存知』構築された仏教思想 シリーズの最新刊。室町時代の念仏者・蓮如という人物を網羅的に描き切った好著である。法然・親鸞・蓮如という縦軸と、当時の本願寺教団・西田三三郎・一向宗・時宗といった軸とをクロソクさせながら、蓮如の生涯や思想特長を読み解いていく。また、蓮如のみならず、浄土真宗という体系全体を知るにも適した一冊となっている。全編にわたって、丁寧な論考と幅広い視点で要所がおさえられており、殊に「御文章(御文)」を深く掘り下げていく考察は読み応え十分である。

樹茂 師

花園大学教授
(仏教学/人文情報学)

①末木文美士著『禅の中世 仏教史の再構築』臨川書房
②桶澤淳・後藤康夫編『眞實撰』『唯識論考』の研究「別要」教理編・上 法蔵館
③伊藤聡・門屋温監修/新井大祐・鈴木英之 大家敬明 平次卓也編『中世神道入門 カミとホトケの織りなす世界』勉誠出版

今年もさまざまな良書にめぐまれたが、ここでは日本中世仏教に対する研究成果をとりあげたい。

④は、2019年に完結した『中世神道研究』全12巻・別巻1巻、2021年の撰本『亀山隆彦・米田真理子編『中世神道の知』』編者としての分野を思想史研究の面から牽引してきた末木文美士氏による論文集である。『中世神道研究』に収録された書籍は、それまでの神仏教に対するイメージをガラッと変えるようなインパクトがあった。続く『中世神道の知』が出版された際は、そのインパクトが確信に変わった。①で

は、日本中世仏教の多様性に裏づけられた中世神の特徵、特に密教との関係が、末木氏の熟練の筆致によって描き出されている。

②は、2019年の桶澤淳『眞實撰』『唯識論考』の研究 仏道篇』等(続く研究成果である。日本中世は論議(法会など)における仏教教理の問答の時代であり、その中心となっていたのは法相宗であった。法相論議については膨大な文献が残されているが、その内容の複雑さから解明が進んでいない。龍谷大学には法相唯識研究の伝統があり、現在でもそれが着実に積み重ねられているのを喜ぶ。本書は一般読者向けではないが、こういった専門書の出版は研究の進展には欠かせない。

③は、仏教を中心とした日本中世の宗教世界を考察するうえで、神道の存在を忘れることはできない。中世神道については、これまでも伊藤聡『神道とは何か 神と仏の日本史』(中公新書)などによって紹介されてきたが、④によってその多様な全貌が見渡せるようになったことは大きな成果である。

留理子 佐久間

大阪観光大学教授
(仏教文化史)

①田中公明著『仏菩薩の名前からわかる大乗仏典の成立』春秋社
②大羽恵著『チベットにおける仏教説話の研究』法蔵館
③杉本卓洲著『インド・ジャータカ図の研究』起心書房

④著者は初期大乗仏典の『般若三昧経』に説かれる八人の在家菩薩やそれを増広した十六正士が、諸経典にどのように登場するのかを述べることも、彼のモデルを大乗仏教興起時代に活躍した在家信徒に求めた。大乗仏教の起源については、仏塔崇拜を称揚する在家の法師が、大乗仏教の成立に深く関わったと考える平川彰らの説がある一方、G・シヨペン、佐々木明らは出家僧団起源説を提唱する。著者は大乗仏教の初期に、在家の菩薩がその成立に一定の役割を果たしたと指摘し、平川説を再評価する。本書は、仏菩薩の名前から大乗仏教の起源に迫った

好著である。

②本書は、三部から構成される。第一部ではブツダの前身物語の「布施太子物語」と伝伝の「舎衛城の神変」の絵画に焦点を当てる。そしてチベットの文獻や絵画様式の成立がインドからの伝播したのではなく、中央アジアや中国から流入した可能性を指摘する。第二部では、チベットで最多の作例が残る「ボータイサツトワ・アウターナ・カルパタ」の説話図が取り上げられ、その奥と絵画様式等を考察される。第三部では、第二部で取り上げた説話図の詳細な図解が収録される。本書は、体系的なチベット仏教説話図の研究成果として注目される。

③ジャータカは一般に「ブツダの前身物語」とされるが、それは本当なのかというのが著者の問題提起である。本書では地域別に作例が網羅的に取り上げられ、時代的な変遷や地域的特徴が述べられる。例えばジャータカは元来「誰でも」の過去世物語であつたが、ブツダの過去世物語へと展開したと指摘する。また地域的特徴の一つとして、南インドでは、嫁家におけるナーガ(ゴラ神)のウボ・サタ(布薩)の裏読みが強調されると指摘する。評者の知見によれば、この実践の場面はタイ国の装飾写本の挿画に描かれる。本書は、アジア各地に伝播したジャータカ図の源泉を知る上で有用である。

道充 花野

法華仏教研究会主宰
(法華仏教思想/日蓮教学)

①曹野博士著『中国仏教の経典解釈と思想研究』法蔵館
②大平宏龍著『日蓮と世界認識』同社
③丹治正弘著『日蓮と世界認識』同社

④は、中国仏教研究の第一人者である著者が、2010年に以降に発表した論考を集めて上梓したものである。天台大師智顛の死について、中国の学者の見解を紹介しながら述べた論考は、中国語に堪能な著者の面目躍如たるものがある。意図的『大乗四論受論』の詳細な訳注を含む研究は、当時の中国仏教を研究する際に非常に有益である。

②は、興隆学院専門学校の校長として、水日蓮教学の研究と教育に専らしてきた著者が、今まで発表してきた論文に新稿を加えて上梓したものである。日蓮遺文の真偽論争、現在の最先端の研究成果の上に、日

蓮の本尊論や、日蓮滅後の門流教学など、新たな視点で考査を加え、自身の仮説を提示している。

③は、著者が放送大学に提出した博士論文を上梓したものである。今まで積み重ねられてきた日蓮研究の概略を記して課題をあげた上、日蓮の世界観、対意識、体制相対化、文化的達成の受容など、これまで明らかにできなかった「テーマ」について検証した論考がまとめられている。

これら三つの書は、それぞれの研究成果をふまえて、それをさらに深化させていくという意欲に満ちた著述である。

泰山 柴田

浄土宗総合研究所研究員
(中国仏教/浄土宗学)

①齊藤隆信著『隋東都洛陽上林園翻経沙門 釈摩訶衍の研究』臨川書房
②若松英輔編『文学者と哲学者と聖者 吉満義彦「レクシオン」』文春学藝ライブラリー
③横内裕人編『対馬の渡来版経 護り伝える東アジアの至宝』勉誠出版

④は「漢語仏典における個の研究」や「中国浄土教の発展の研究」を上梓した著者が、長年にわたり丹念な調査と精緻な研究を続けてきた中国時代の彦殊という人物に関して、その生涯や著作についてまとめた一書である。同時に中国仏教を研究する者にとって、この彦殊という人物は極めて興味深い存在でもある。塚本善隆や牧田諦光の研究方法を発展的に受け継ぐとともに、積極的にフィールドワークを行う著者の研究は、新たな中国仏教研究の方法論を提示するとともに、今後の中国仏教史および現代仏教研究の指針となっていくであろう。

②は井筒俊彦や小林秀雄などの評伝をまとめた、あるいは自身の詩集を発表している若松英輔がまとめた、吉満義彦(1904-1945)のアンソロジーである。1926年にオットーが『西と東の神秘主義』を1949年に井筒俊彦が『神秘哲学』を上梓していることを考えると、この吉満という人物は井筒以前に西洋哲学や神秘哲学を自身の学問と信仰の背景として受容し、そして独自の宗教哲学を展開したことが分かる。若下壯一や吉満や井筒の問題意識を継ぎ受け、そこから新たな宗教哲学を構築する必要があると思う。その意味でも「近代の超克問題が所詮、いかんして近代人は神を見いだすかの問題に帰する(500頁)という記述は、とても重たいものがある。

③は対馬に残る高麗版大蔵経に関する最新の総合的研究である。ここ数年、筆者が個人的にも大蔵経研究に関与していることもあり、2019年に九州国立博物館で開催された「版経東漸 対馬がたどった仏教」は実に興味深い展示であった。大蔵経は質量ともに膨大な仏教聖典であり、大蔵経の中の「文字」が、そのまま仏の智慧と救済を信じたすべての人々による「仏の教え」を人類の未来へという願いと「全世界の平和と安福への祈り」である。今後、さらに大蔵経研究が発展していくことを心から願うものである。

奈央子 小林

愛知学院大学教授
(宗教学)

①安井真奈著『狙われた身体―病いと妖怪とジェンダー』平凡社
②徳永善子著『憑霊信仰と日本中世社会』法蔵館
③櫻井弘人著『遠山稲月祭の研究』岩田書院

④は「狙われた身体」という刺激的なタイトルと「病いと妖怪とジェンダー」という副題、著者の研究をよく知る人でもその中身について興味を掻き立てられる。弱い立場、社会の中で劣位に置かれてきた女性や子どもは歴史的に「狙われやすい」ものとされ、妖怪に「狙われた身体」の伝承を「不思議な現象」が身体に生じたときの説明と対処の方法として読み直す、という視座に本書は立っている。雑誌や絵画史料、海外研究に至るまで様々な材料を通じて分析がなされ、著者の広い目配りで集められた膨大な記録と情報、知見の集大成としての本書の備量は、誰も追いつけないものである。

承にはほちその非対称性に関するものが多く、ジェンダー問題もあるとする著者の主張には納得がいく。

②は、貴族の日記・史書・僧伝・寺社縁起・説話・物語、さらには絵巻物を中心とする絵画史料を用いつつ、ヨリマシやニニにある憑霊技法を介して、神・仏・死者との交感の実態を、10世紀から14世紀を対象として詳らかにしている。「験者」と「修験者」を同義詞とした、前者は後者の前身とする通説を、厳密な史料分析から否定して再定義している。また、女性職能者としての「ミコ」について、社会の周縁に押しやられ、史料の限界があると自認しながらも、『橘柱寺縁起』『春日権現験記』などの絵画史料を解析しながら、その真相を明らかにしようと努めている。

③は、遠山稲月祭りの地元(長野県飯田市)で生まれ育った著者による746頁にわたる大著である。著者は飯田市美術館の学芸員を長年勤め、遠山稲月祭はもちろんで、遠山で開催される小祭りにも毎年通い、調査・研究を重ねてきた。祭りの伝承者をはじめとする村人に、祭りの行なう平時でも聞き取り調査を行ったり、文献資料や祭礼道具・建物の整備調査まで併せて多角的に遠山の祭を解明しようとしている。そうして集められた膨大な記録と情報、知見の集大成としての本書の備量は、誰も追いつけないものである。